第２回狭山市協働推進委員会会議録

開催日時　　令和３年１２月１０日（金）
　　午前９時２０分から午前１１時４５分まで

開催場所　　狭山市役所６階　６０５会議室

出 席 者　　７名

欠 席 者　　３名

事 務 局　　協働自治推進課　３名

１　開会

２　委員長あいさつ

３　議題

（１）令和３年度提案型協働事業の中間報告（４月から１０月まで）について

市民提案型協働事業

□見えない違いに目を向ける「まちづくり」in SAYAMA

MA-ZIRY（マジリ）より報告（資料№１を参照）

１つ目の事業として、令和３年８月に、LGBTQの基礎知識の啓発リーフレットを作成し、各公共施設や福祉施設、市内の小中学校、令和３年度狭山市新規採用職員研修時に配布した。来年度は、狭山市の各事業所にも配布を予定している。

２つ目の事業として、令和３年９月１８日（土）午前１０時３０分から正午まで、オンラインにて「多様性を認め合う街づくりについて考える～LGBTQを知ろう～」と題して、ミニ講演会を開催した。２０代から８０代までの１１名が参加した。

３つ目の事業として、令和３年１１月１４日（日）１３時３０分から１４時３０分まで、狭山市市民交流センター研修室にて、「多様な性を認め合う街づくりについて」と題して、意見交換会を開催した。６名参加予定であったが、当日は１名が欠席となり、５名が参加した。

成果としては、講演会や意見交換会を実施できたこと、また、狭山市初の啓発リーフレットを作成し、狭山市パートナーシップ宣誓制度の運用開始（令和３年１０月１１日月曜日）前に、各施設や令和３年度狭山市新規採用職員研修時に配布できたことである。課題として、市民活動団体に知識を役

立てたいという意見があり、講演会等の参加人数を確保するための広報活動を行っていくことが現在の課題である。

今後の予定及び展望として、令和４年２月６日（日）午前１０時３０分から正午ごろまで、ヨガ交流会を開催する予定で、「多様な性を認め合う街づくり」の一助となる活動を推進することを展望している。

【委員からの意見】

（委員長より質問）

・設立されたのは、いつごろか。

⇒２０２０年８月に設立し、国籍や性別、性の違い、障がいの有無を問わず、自分の住んでいる街を過ごしやすい街にという想いから立ち上げた。

・団体を立ち上げる前に行っていたことは。

⇒日本社会事業大学社会福祉士課程で知り合ったメンバーで構成し、目に見える違いだけでなく、目に見えない違いを推進していきたいということで団体を立ち上げた。

・コロナ禍で感じたことについて

⇒本来は、ミニ講演会を対面で行うつもりでいたが、オンラインでの開催となった。唯一対面でできた意見交換会では、コロナ禍で、孤独を感じている人や親子での居場所がないという意見がでた。コロナ禍で交流することの難しさを感じた。

（委員より質問）

・提案型協働事業において、行政にもう少し取り組んでほしかったことは。

⇒行政とは、密に関わり合いをもっており、もう少し取り組んで欲しいことはなく、１年目かつコロナ禍の状況である中で、団体の活動は、上出来であると感じている。

（委員より質問）

・パートナーシップの関係で、反響がどの程度あったか。

⇒パートナーシップ宣誓制度が導入されてから、様々な相談があった。また、宣誓制度前からリーフレットが作成・配布できたことはよかった。

・ジェンダーの関係についてどのように考えているか。

⇒難しい問題であるが、性的思考や考え方など、多くの方がもっているものであり、今後もすべての人に関係するものだと啓発していく。

（幹事より質問）
・MA-ZIRYの名前の由来は。
⇒MAは真、ZIは時、RYは理になっており、漢字にすると、真の時代を理解するという意味になる。A-Zはローマ字にするとすべての人が対象という意味である。

□狭山市犯罪被害者・交通被害者等支援の会
犯罪被害者等支援事業より報告（資料№.２を参照）
オリーブの会とは、犯罪被害に遭われた方とその家族を支援する会であり、私も被害者の一人として、心情が分かる。被害者の方を元気にしたいという気持ちで会を発足した。
事業の目的として、被害者の方は、外見上気丈に振舞っている方が多いが、精神や内心は死んだ状態の方も多く、精神を回復させる支援を目的に行っている。昨年は、コロナ禍で事業を中止していたが、今年は、令和３年１０月２３日（日）狭山市市民交流センターにて、講演会を実施し、コロナ禍で人数を制限して、３５名が参加し、１０名が別室よりリモートで講演会に参加した。また、会場の外でも支援になるならと５名が参加した。
来年度以降は、狭山市の協働事業補助金がなくなるが、愛知県の企業から、補助金をいただける予定である。
【委員からの意見】
（委員長から質問）
・令和３年１２月１１日（土）のセミナーの参加予定人数は。
⇒約１２０名の申込みがあり、さいたま市や久喜市、杉戸町からの参加者もおり、埼玉県庁の職員２名と埼玉県警の職員も参加予定である。

（委員より質問）
・今後の取り組みの中で、高校性・大学生に向けてどのように啓発をしていく予定であるか。
⇒東京では、命の授業と題して、年間５０回の講演をしており、今後、狭山市でも命の授業の講演会を開催するため、学校に働きかけていきたい。

□障害のある人もない人も楽しめるビリヤード教室
さやまビリヤード愛好会より報告（資料№.３を参照）
さやまビリヤード愛好会とは、さやま市民大学のビリヤード養成コースの卒業生で立ち上げた団体である。身体的・社会的健康づくりを目的としている。事業としては、障害のある人もない人も楽しめるビリヤード体験講座を実施し、令和３年１１月２２日（月）～２６日（金）の４日間で、延べ４０名の参加があった。

また、障害のある人もない人も楽しめるビリヤード教室を令和３年１２月３日（金）から開催し、現在７名が参加している。

今後の展望として、子どもたちと高齢者の交流の場を広げるために活動をしており、今後もさらに活動を広めていきたい。

【委員からの意見】

（委員長より質問）

・会員の人数は。

⇒現在３６名で活動しており、コロナ禍で全員が集まることは難しいがいろいろな工夫をしながら活動をしている。

（委員より質問）

・コロナ禍で施設入居者の制限等の関係から、大樹の家からは参加できなかったが、障がいのある方の参加はどうか。

⇒半分以上の参加者の方が、障がいのある方だったが、参加していただけた。

□ふるさと狭山の遺産「広瀬斜子織の普及啓発と復元」

狭山遊糸会より報告（資料№.４を参照）

子どもたちを中心とした織物体験事業を、公民館や児童館を中心に活動することができた。さらに狭山市文団連主催の青少年文化体験フェスタでは、

小学生を対象に、広瀬斜子織の織物体験を開催し、１６名の参加があった。その様子を狭山遊糸会のホームページに掲載しているので、見て頂ければと思う。

最近織った布が、目指している広瀬斜子織に近づいてきており、来年度中に再現できることを目標としている。さらに、来年１月には、狭山市役所のエントランスに広瀬斜子織の成果物を展示するので、観ていただきたい。また、ホームページにも力を入れているのでぜひ見てほしい。

【委員からの意見】

（委員より質問）

・地元の小中学生と連携してはどうか。

⇒織の体験事業ができるように、学校との連携を進めていきたい。

（委員より質問）

・広瀬斜子織を実際に織れる人はいるのか。

⇒実際に織れる人は少ない。ただ、広瀬斜子織の織物を持っている人から、現物を調べさせていただき、活動を進めている。しかし、現在、織機や織物が減っており、文化・伝統が継続できるかが今後の課題である。

（委員より質問）

・携わっている会員は何名ほどいるか。

⇒２５名いる。ただ、場所が狭いため、全員が集まることができないのも課題である。

・織機が重かったりするが、イベント等の際どうするか。

⇒私たち団体が、織機を持って車で出張している。

（委員長より質問）

・郷土の偉人と言われている清水宗徳が起こされた事業と広瀬斜子織との関係について

⇒最初は、川越斜子織と呼ばれていたが、実際は広瀬で織られていることから、清水宗徳が中心となって広瀬斜子織に変わっていった。

□道にお絵かき！？大っきなところに描いてみよう♪
～コロナなんかに負けないぞ！～

Sayama　Second　Stage（３S）より報告（資料№５を参照）

３Sは、対話の場づくりとして、「つな×つなさやま」を開催してきたが、コロナ禍で開催を中止しており、市民提案型協働事業を検討した結果、狭山市駅西口市民広場にて、ダストレスチョークを用いた親子参加型お絵かきイベントを開催することとした。事業の目的としては、コロナウイルス感染症の影響による先の見えない閉塞感の解消及びコロナに負けないという意識の醸成を図ることである。

進捗状況として、第１回目の打合せを令和３年４月２４日（土）に実施し、事業内容の共有、開催日程、申込方法の確認を行った。第２回目の９月４日（土）の打合せは、緊急事態宣言発令中により中止とした。９月１４日（火）市と意見交換会を行い、参加する年齢のワクチン接種率が高かったため、事業を実施することにした。１０月３日（日）に、第２回目の打合せを実施し、描いた絵の保存期間について議論した結果、狭山市駅西口市民広場のイルミネーション事業と日程が被り、絵が踏まれる心配があることから、当日に絵を消すことにした。１０月２５日（月）に会場の汚れた箇所を洗浄した。申込方法として、QRコードから読み取れるようにし、締め切り期間より前に定員に達することができた。

【委員からの意見】

（委員長より質問）

・参加者はどのような反応だったか。

⇒参加者全員が楽しそうに絵を描いていた。当日、参加したいという方もいたが、コロナ禍で密を避ける目的で、予約制としたためお断りをした。当日参加の対応を、どのようするかが今後の課題であると感じた。

（委員より質問）
・どの年齢が多かったか。
⇒親子参加型なので、小さい子供が多かった。

（委員より質問）
・団体として、何名の方が協力していたか。一番大変だった課題は何か。
⇒団体、ボランティア合わせて１３名で運営した。
・一番大変だった課題は何か。
⇒レイアウトの作成や会場設営が大変だった。

行政提案型協働事業

□狭山市版　食のセーフティネットの仕組みづくり

フードバンクさやまより報告（資料№.１を参照）

食のセーフティネットの仕組みづくりとして協働事業を提案した。狭山市役所フードドライブは、今年で２年目になり、毎月第４火曜日に実施しているが、食料品が多いときや少ないときがある。社会福祉法人至福の会では、多くの食料品を譲渡していただき、仕分け作業からフードドライブを行っている。

また、らくらくファームからは、狭山市中の子ども食堂に声をかけてくれる。狭山市包括連携協定の関連から、レジアスインパクト株式会社より、１１月に１３９キロほどの食料品を譲渡していただけた。また、ファミリーマートについては、４店舗に協力をお願いしている。

【委員からの意見】

（委員長より質問）
・フードドライブが急速に増えたことによる課題は。
⇒食料品を保管することが課題である。衛生管理者を置き、保管場所についても、決められたルールに従わなければならず、そのことが大変である。しかし、それは倉庫を持つ場合であって、現在は、近隣市のフードドライブと協力していけば、倉庫を持つほどではない。
・今後のスケジュールについて
⇒突然食料品が増えたりする場合が多いため、スケジュールを立てることは難しいと考えている。

（委員より質問）
・個人の繋がりだけでなく、いろいろな繋がりや仕組みができればよいのではないか。
⇒他市では、困りごとの相談等に対応するためのベースができているケースが多く、狭山市でも相談等ができるベースを作ることが今の課題である。

□シンサヤマミューラル事業

新狭山北口商店会より報告（資料№.２を参照）

事業の概要として、新狭山商店会のシャッターや壁にアートを描くもので、地域の住人やアーティストが事業の当事者となり、商店街の風景を「自分たちで創ること」でまちに対する愛着を醸成することを目的としている。年間４件の実施を予定し、１０月末時点での活動状況として、１件目は、令和３年７月１８日（日）に商店街の空き店舗の内壁を白く塗りつぶす壁塗りワークショップを開催し、地域の子どもたちや美大生を合わせて３０名が参加した。事業実施後は、地域の美大生が、創作活動を行うアトリエとして、活用している。若者の交流拠点となっている。

２件目は、商店街内にある木村布団店のシャッターにアートを描いた。「令和３年８月２３日（月）～９月２１日（火）」に、新型コロナウイルス感染症の影響の観点から、ライブアートイベントの開催は見合わせたが、アーティストである美大生と店主がコミュニケーションをとり、良い作品ができた。

２件目の事業は、狭山市公式YouTubeに公開され、令和３年９月４日（土）にテレビ埼玉から取材を受け、こちらもYouTubeに公開されている。

【委員からの意見】

（委員長より質問）

・今後の取り組みをどう考えているか。

⇒すべてのシャッターに絵を描くことが目的ではなく、地域の人とコミュニケーションをとることを目的としている。

・アーティストはなにをされている方か。

⇒武蔵野美術大学の学生である。

（幹事より質問）

・シャッターは、お店が閉まっていると見えないがその時の対処は。

⇒西武文理大学のバスターミナルの外壁に子どもたちが絵を描いて、誰もが見えるようにしている。

・今後も北口商店会だけで行う取組か。

⇒北口、南口関係なく、新狭山商店会として新狭山駅周辺を巻き込んでいくことが最終目的である。

□障がいのある方が教える「ボッチャ教室」

社会福祉法人茶の花福祉会　大樹の家より報告（資料№.３を参照）

今年度の活動状況として、３回の教室を開催予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、１回目、２回目は中止とり、３回目の教室を令和３年１０月２１日（木）に開催することができ、１７名（３０代～８０

代）の参加があった。

当日は、１チーム３名で構成し、経験者が初心者に教えながら試合を行った。また、大樹の家のスタッフは、新型コロナウイルスの感染症の観点から、大樹の家より、リモートで参加した。初のリモートのため、たくさんの練習を重ね、当日は、ボッチャの説明や準備運動を参加者と一緒に行うことができた。

コロナ禍の実施となり、今年度一番の事業の柱である、「障がいのある方が教える」という部分が間接的になってしまったので、会場での交流を実現したい。また、今後は、幅広い年齢の方々へ働きかけ、ボッチャを通じて交流や障がい者の理解促進、健康づくりにつなげていきたい。

【委員からの意見】

（委員長より質問）

・障がいのある方が教えることの難しさとは何か。

⇒一般の方と一緒に何かをすることが初めてで、スケジュールを立てたり、ボッチャを教えるための自分たちのスキルアップが必要だと感じた。

□全体を通しての意見

・委員

コロナ禍でも団体はよく活動ができていると感じた。

・委員

第１回目の委員会では、書面での開催だったため、提案型協働事業として、実施をしても良いのかと考える団体もあったが、直接団体から話を聞くことで、提案型協働事業として必要だと感じた。

・委員

事業を実施する団体として、学ぶべき内容が多くあった。また、私たちの団体は、障害者支援事業であるため、各事業に参加する側の気持ちや支援側の気持ちとして当委員会に参加することができ、狭山市で行っている事業を知ることができた。

・委員

素晴らしい事業を市民のために行っているということをもっと広く周知していく必要があると感じた。

・委員

８つのテーマを確認し、多様性を認め合う社会の形成や社会的問題であるフードバンクや犯罪被害また、市の文化的・伝統的な事業をどう継承していくか等の課題を各団体が取り組んでおり、協働事業の重要性を再認識した。昨年は、書面での判断であったが、当委員会のように、プレゼンテーション等として、各団体と行政が一緒に開催することが狭山市として象徴的だと感じた。

・幹事

書面では、伝わらなかったことがプレゼンテーションを通じて、内容がよく分かった。今回の事業は、大きなイベントではなく、市民の生活等を裏支えしているような団体が多く、徐々に地域の中に根差していくのではないかと感じた。

また、３年目が終了し、狭山市協働事業補助金等の対象にならない団体について、どう支援をしていくかが重要で、行政として支援するか、民間の資金獲得方法等の仕組みを検討していくのかが今後の取り組みになっていくのではないかと感じた。

・委員長

収入が少ない団体でも活動していくための取り組みを知ってもらうためにも、周知方法を検討していく必要があると感じた。

５　閉会